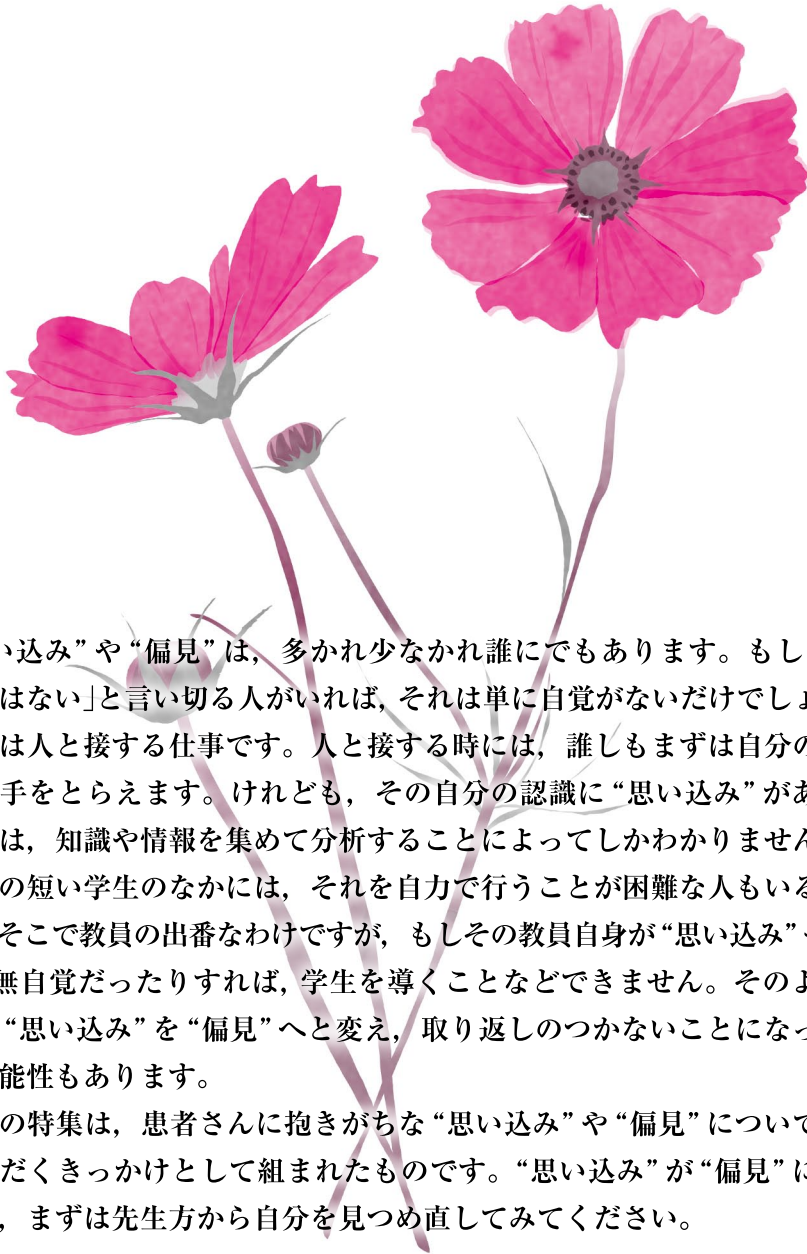


思い込みと偏見

教育的に「見方」を変えるには



“思い込み”や“偏見”は、多かれ少なかれ誰にでもあります。もし「そんなものはない」と言い切る人がいれば、それは単に自覚がないだけでしょう。

看護は人と接する仕事です。人と接する時には、誰しもまずは自分の認識内で相手をとらえます。けれども、その自分の認識に“思い込み”があるかどうかは、知識や情報を集めて分析することによってしかわかりません。人生経験の短い学生のなかには、それを自力で行うことが困難な人もいます。そこで教員の出番なわけですが、もしその教員自身が“思い込み”や“偏見”に無自覚だったりすれば、学生を導くことなどできません。そのような態度は“思い込み”を“偏見”へと変え、取り返しのつかないことになってしまう可能性もあります。

今回の特集は、患者さんに抱きがちな“思い込み”や“偏見”について考えていただくきっかけとして組まれたものです。“思い込み”が“偏見”になる前に、まずは先生方から自分を見つめ直してみてください。